



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語の自己卑下表出に関する一考察
Author(s)	隋, 暁静
Citation	研究論集, 18, 63 (左) -76 (左)
Issue Date	2018-12-26
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.18.l63
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72436
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_005_sui.pdf



日本語の自己卑下表出に関する一考察

隋 暁 静

要 旨

日常会話で、われわれはよく何らかについての評価を行う。それらの評価には、肯定的な評価もあれば、否定的な評価もある。そして、相手や第三者、あるモノや出来事に対する評価も、自分に対する評価もある。話し手が自分に対して評価する際には、話し手があえて自分、あるいは自分側に属するモノ／コト／ヒトに関して、否定的に言語化する例も少なくない。このように、話し手が自分自身に対して否定的評価を行うことを本稿では「自己卑下表出」と呼ぶことにする。本稿はその使用文脈と話し手の発話意図から考察した結果を示したものである。

まず、本稿の考察対象となる「自己卑下」を、「話し手が、会話の相手に対して自己、あるいは自分側に属するヒト／コト／モノに対して特定の基準にあわない、逸脱したものとして低く価値づけること、あるいは自己の否定的な側面となりがちな情報や事実に言及し、呈示すること」と定義しておく。そして、「自己卑下」とよく似た概念で、「自分の能力・価値などを低く評価すること。控えめに振る舞うこと」である「謙遜」との相違点を明らかにするために、用例を見ながら、両者の関係と位置づけを明確にした。

続いて、自己卑下の種類を見てから、自己卑下表出の使用における文脈や話し手の使用動機などについて考察し、話し手が他者からよく思われたいと期待する自己奉仕的な動機もあれば、対人関係をより良くしよう、会話をスムーズに進めようといった対人関係を良好にするという動機もあった。さらに、相手の行動や言葉遣いなどに対する不満や文句を表し、相手に対する否定的評価を引き出す用例も考察した。自分自身のことを低く評価する自己卑下表出は、使用される場面や文脈によって、いくつかの機能が見られることから、話し手の言語運用上の一種のストラテジーにもなっているのではないかと思われる。

1. はじめに

日本語のポライトネスに関する研究は多くなされてきている。円滑なコミュニケーションと良好な人間関係を保つために、日常会話では、われわれは常に相手のフェイスを侵害しないように対人関係に配慮しながらコミュニケーションを行う。それと同時に、話し手自身も自分のフェイスが侵害されないように言語行動をするが、時には、話し手があえて自分、あるいは自分側に属するモノ／コト／ヒトに関して、否定的に扱って言語化する例も少なくない。例えば、「ほめ」行為に対する謙遜表現や、「私の勘違いかもしれませんが」といったような前置き表現などはそれにあたるが、他に、会話の流れで、話し手自身が自ら自己否定的表現を使って自己卑下することもよく見られる¹。

(1) A：日本語上手ですね。

B：いえいえ、全然だめです。

(2) 私の勘違いかもしれませんが、

(3) 僕は性格が悪いんです。

(4) 僕にはもったいないです。

「ほめ」行為に対して、自然に自己卑下して謙遜を表す(1)のような用例もあれば、(3)のようにかなりの文脈が必要となる自己卑下表出の用例もある。そこで、本稿はそれらの表現が使われる文脈を分析し、その使用動機を考察したい。具体的には、話し手の自己卑下表出が使用される文脈から分析し、話し手がどういう状況であるいは相手のどういう発話や行為を受けて、自己卑下表出を開始したのか、そしてその意図は何かについて考察していきたい。

2. 先行研究

自己卑下表出に関する先行研究のほとんどは、社会心理学の視点から行われている。また、研究方法も質問紙調査に限られたものが多いようである。遠藤(1995)は日本人とカナダ人を調査対象として研究を行い、「謙遜」がカナダ人に対してはポジティブな印象を与えないという結果を見いだした。そして、同じ文化を共有する人々の間で、「謙遜とは、より望ましいものとしての印象を獲得するための、逆説的自己宣伝にほかならない」と述べた。齋藤(2006)は「日本人は内心の自己評価より控えめで自己卑下的な自己呈示をし、良好な関係を維持しようとする

¹ 本稿では、分析の便宜上、特別に説明しない限り、話し手は「自己卑下を行う」側で、聞き手は「自己卑下の提示を受ける」側を指す。そして、話し手の自己卑下の部分は下線で示す。

る」と述べている。遠藤（1995）と齋藤（2006）の考えでは、日本語の自己卑下表出は「自己奉仕」的機能もあれば、対人関係上でも有利に働く表現となる。しかし、それらはすべて社会心理学的な視点からの分析となるため、日本語の日常会話で使われる自己卑下表出の使用動機などを考察するには、実例を使って検討する必要があると考える。

実際の会話上の自己卑下表出に関する研究に、全（2015, 2016a, 2016b）²が挙げられる。全（2015）は自己卑下呈示に対する受け手の発話に注目し、「自己卑下呈示を否定する」と「共感を表明する」ことを考察した。全（2016a）は自己卑下呈示の出現の仕方を検討して、「相手の質問の答えとして出現する自己卑下呈示」「能力をほめられた後出現する自己卑下呈示」「相手の自己卑下呈示の後出現する自己卑下呈示」「自分と関連したエピソードを話す際に出現する自己卑下呈示」といった4つの出現型に分類した。そして、全（2016b）は自己卑下呈示の出現における日韓対照研究を行っている。

全（2015, 2016a, 2016b）が実際の会話から考察したのは有意義であると思われるが、まだ不完全なところがあると思われる。まず、具体的にどのような状況で話し手がどういう動機や意図で自己卑下を開始したのかについて考察する必要がある。次に、使用文脈や話し手の使用動機によって、聞き手は単に否定をしたり、共感を表明したりするだけでなく、他の反応（あるいは話し手の自己卑下した部分に反応しなくてもいい場合）を示すこともあり得るのではないかと思われる。それに、先行研究ではあまり議論されていないが、「自己卑下」とよく似た概念である「謙遜」との区別についても考察する必要がある。

従って、本稿も実際の会話における日本語の自己卑下表出に着目し、考察を行っていきたい。なお、本稿での分析例は、テレビドラマの台詞が比較的日常会話に近いという趣旨のもとで、主に作例や、コーパス及びテレビドラマの台詞などから抽出したものである。3節では、自己卑下の定義と分類及び謙遜との関係づけについて考察しておき、つづいて、4節でその使用文脈から話し手が自己卑下の使用における動機について考察し、5節で本稿の内容をまとめる。

3. 自己卑下の定義及び分類について

3節では、自己卑下の定義と分類について考察してから、謙遜と自己卑下との相違点を明確にする。

3.1 自己卑下の定義について

ここでは、まず自己卑下表出の定義について考察しておきたい。用語について、吉田・浦

² 全（2015, 2016a, 2016b）は、社会心理学の視点からの先行研究に倣って、「自己卑下呈示」という用語を使っている。

(2003) は、自己卑下呈示を「他者に対して選択的に自己の否定的な側面を呈示すること、自己の肯定的側面を積極的に呈示することを避けること」と定義しているが、厳密に言えば、それは定義というより、自己卑下の方法の規定にすぎないのではないと思われる。それに、否定的側面とは何かについても曖昧である。そして、言語学、語用論の視点から分析するのであれば、自己卑下表出とは具体的にどのような言語行動なのかについてあらかじめ明確にしなければならない。

吉田・浦(2003)でいう「否定的な側面」とは具体的に何を指すかは曖昧であるため、ここで筆者は関崎(2014)における「否定的評価」の定義を援用したい。「否定的評価」について、関崎(2014: 12)は次のように定義している。

否定的評価:「会話の相手と、相手に属する人／モノ／コトに対して特定の基準に合わない、逸脱したものとして低く価値づけ、それを表現すること」

そして、ここでもう一つ留意したいことがある。それは、評価対象に関する事実や情報の中でも、否定的評価となりうるものがあることである。例えば、試験で30点しかとれなかった事実や、評価対象にあるよくないくせ、過去の失敗に関する情報などは評価対象にとっては好ましくないこととなって、否定的な側面となりがちである。故に、話し手自身がそういった否定的な評価となりうる情報や側面について言及するのも自己卑下の一つとなるのではないと思われる。要するに、本稿は、話し手の自己卑下は主に自分自身を低く評価することと自分に対する否定的な評価となりがちな事実や情報などに言及することを指すと主張したい。

従って、本稿では、吉田・浦(2003)と関崎(2014)の考え方に倣って、自己卑下を「話し手が、会話の相手に対して自己、あるいは自分側に属するヒト／コト／モノに対して特定の基準に合わない、逸脱したものとして低く価値づけること、または自己の否定的な側面となりがちな情報や事実と言及し、呈示すること」と定義しておく。

3.2 自己卑下の分類について

自己卑下表出の分類について、全(2016b)は卑下内容によって、「能力卑下」「性格卑下」「状況卑下」と分類している。内容面から見た分類としては適切であるだろうが、全(2016b)における分類はまだ不完全であると思われる。それは、自己卑下の内容とは異なる基準によって分類することがあるからである。

自己卑下の定義からも分かるように、ここで否定的な側面と言うのは否定的評価や低く評価することを指す。そして、その否定的評価をすることや低く評価づけることには、何かの基準があると考えられよう。ここで、まず一般的な基準により評価する場合と、他に比較対象あるいは参照対象の誰かがいて、その人より劣った評価をする場合があると考えられる。

従って、自己卑下表出はまた、他の比較対象あるいは参照対象の有無によって、分類できると思われる。つまり、まず誰かと比較することなく単純な自己卑下と自分が他者より劣った者であると他者を高めるような自己卑下とに分けることができる。そして、さらに、自己卑下とともに行われる他者を高める自己卑下表出をその「他者」と話し手及び聞き手との関係から下位分類を試みる。

例えば、(5)～(8)の例では、「僕にはもったいない」と自己卑下している。「もったいない」は本来「お金がもったいない」や、「物の価値を十分に生かしきれておらず無駄になっている」などの意味を表しているが、ここで、誰かが話し手にとってはもったいないというのは、その誰かが話し手の相手としてはもったいない、話し手がその相手として相応しいというレベルに及んでいないという意味で、自分のことを卑下して、その他者を高めている。ここでの他者は主に会話の相手、聞き手の身内、話し手の身内、及びその他の第三者が考えられ、ここでの「もったいない」はそれぞれ相手高め(例5)、相手の身内高め(例6)、身内高め(例7)及び第三者高め(例8)となる。会話参加者とここでの他者との関係によって話し手の自己卑下の動機や効果も違って来る。それぞれ以下の例で示す。

(5) 【告白された相手に】

A：僕にはBさんはもったいないです。 (作例)

(6) 【津崎が、(契約)結婚をする森山みくりの父親と行った会話】

01 津崎：みくりさんは何でもできて、僕にはもったいない人です。むしろ、森山家の皆さんに申し訳ないと

02 森山(父親)：いや、こっちこそ。まさか京大出身の息子ができるなんて、【妻に向かって】ねえ。

『逃げるは恥だが役に立つ』第2話

(7) 【前日の夜、酔っぱらった小林を家まで送った会社の先輩の黒川と翌日の朝会社で会った場面】

01 黒川：よう、酔っぱらい。

02 小林：あつ、黒川先輩、昨日は申し訳ありませんでした。

03 黒川：奥さん、かわいいじゃないか。

04 小林：そうなんです。僕にはもったいないぐらいで【笑顔で言う】

05 黒川：のろけやがって。

06 小林：すみません。

『うちの夫は仕事ができない』第3話

(8) A：Cさんのこと、好きなんだろう。誘ってみたら？

B：あの子は性格も良くて可愛いから、僕にはもったいないよ。 (作例)

以上の例が示すように、同じ自己卑下表出である「僕にはもったいないです」であっても、話の相手と高められる対象が変わった場合、その意図と効果も違ってくる。(5)では自分を下げながら相手を高めて、拒否の意を表すことができる。(6)では「大切な娘を嫁にする」結婚する相手の父親に対して、自分を卑下して聞き手の身内である娘のことを高めている。(7)では身内を褒められた話し手が、その褒めを受けつつ、自分のことを卑下している。(8)では第三者の人を高めながら自己卑下して、誘う勇気がない言い訳になるのか、本当にCの相手として相応しくないのかを表している。

3.3 自己卑下と謙遜との関係と位置づけ

以上述べた自己卑下の定義及び用例からも分かるように、謙遜を表す表現も自己卑下の中に含まれると言える。「ほめ」に対する自分自身を低く評価する謙遜と自己卑下とはよく似た概念であり、両者の相違点を明確にする必要がある。

確かに、自己卑下と謙遜とは自分のことに対して低く評価することは同じであるが、その低く評価する点でニュアンスが出てくる。釜田(2017)は辞書の記述を参照しながら、「卑下」と「謙遜」を次のように整理している。

「卑下」の場合は自分を劣っている者として扱い、「謙遜」の場合は控えめに振舞う点で、微妙にニュアンスが異なることと考えられる。つまり、「謙遜」は自分が劣っていると伝えることを目的としておらず、実際の能力や経験を高くみせないために控えめに振舞うことに重点が置かれていることが想定される。

釜田(2017: 63)

釜田(2017)は自分のことに対して低く評価する点で両者のニュアンスを指摘したが、両者の位置づけを明確にするために、両者の重ならない部分についても考察する必要がある。まず、次の例が示すように、控えめに振る舞うことは、自分のことを下げなくても実現できるため、謙遜とはなるが、自己卑下にならないものがある。

(9) A: 今回のイベント、うまくできたじゃないですか。

B: 皆さんが助けてくださったおかげです。

(作例)

(10) 【訴訟で勝った後、みんなが古美門事務所でお祝いの場面】

01 服部: 羽生先生もずいぶんご活躍されたと伺ってますよ。

02 羽生: とんでもない。古美門先生の法廷戦術を間近で勉強させてもらって、ただただ圧巻でした。こちらで弁護士経験をさせてもらって、本当によかった。

『リーガル・ハイ2』第1話

(11) A：英語上手ですね。

B：いえいえ、まだまだです。周りに英語が上達した人はいっぱいいますから。

(作例)

以上の例が示すように、仕事に成功したことや言語能力が優れたことなど、相手に認められて褒められた場合、話し手はなかなか自分一人の力だけではできないことや(9)³、または自分のほうが勉強させてもらったことで利益を得たのを強調したこと(10)、他の人と比べれば、自分がそれほど上手なわけではないこと(11)などと言って、控えめに振る舞い、おごらない態度で謙遜を表したが、これらの例は自己卑下としては扱いにくい。

次に、自己卑下とはなるが、謙遜となりにくい例を見てみる。

(12) 【A は自分が不適切なことをしたのに気づき】

A：私、バカだよな。

B：そんなことないよ。

(作例)

(13) 【酔っぱらった津崎を車で送った百合と風見との話について】

01 津崎：あの、この間、百合さんの車の中で、実は起きてて、風見さんの話を聞いて、
とっても大事なことに気づくことができました。ありがとうございました。

02 風見：狸寝入りで人の話を聞くななんて、悪趣味だな。

03 津崎：すいません。

04 風見：なーんて【笑い】気づいてました。

05 津崎：気づいてて、あの話を？

06 風見：僕は性格が悪いんです。

『逃げるは恥だが役に立つ』第10話

以上の例では、文脈から見ても、自己卑下をする程度から見ても、自己卑下とはなるが、謙遜とはなりにくいと思われる。従って、本稿では、謙遜と自己卑下を次のように簡単に位置づけたいと思う。

自己卑下と謙遜とは自分自身を低く評価するという重なった部分はあるが、自己卑下表出は言語運用上の戦略として使われており、謙遜を示すことはそのうちの一つであること

³ (9)の例では、字義通りに「助けてくださった皆さん」への感謝の意のみを表す解釈も可能であるが、本稿では自分の成功について述べる際に自身の能力に言及せずに「皆さんのおかげである」と婉曲して述べることで謙遜という態度が表される場合の例である。

である。そして、控えめに振る舞う謙遜の手段として、自分のことを低く評価する自己卑下表出を使用することはあるが、それ以外に、いろいろな手段もある。

簡単に図で示すと、次の図1のようになる。aの部分は両者が重なった部分を示している。

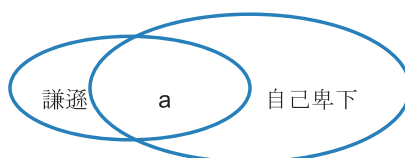


図1 自己卑下と謙遜との関係と位置づけ

4. 使用される文脈と使用動機からの考察

4.1 文脈とは

加藤（2009）は文脈を一次文脈と二次文脈に分類した。一次文脈には「形式文脈」、「状況文脈」、「知識文脈」がある。二次文脈は「形式文脈と知識文脈、また、状況文脈と知識文脈など複数の文脈を利用して、あるいは、知識文脈の内部で、推論を行うことで新たに得られる想定」である（加藤 2009：214-215）。そして、「形式文脈」「状況文脈」「知識文脈」について、次のように詳細に述べている。

「形式文脈」：同一セッションの内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなる。原則として、セッション参加者が共有していなければならないものであり、命題の形で談話記憶に蓄積できる陳述性の情報である。

「状況文脈」：セッションの進行と時間的に平行して存在する物理的な状況を認識することで意味化したもの。原則として、セッション参加者が共有可能であり、命題の形にすることができるが、その度合いは一定でない。認識が容易なものは共有度が高く、共有も義務的であるが、容易に認識できないものは共有の義務も低い。

「知識文脈」：セッションが開始する以前から、セッション参加者が持っている知識のうち、言語知識を除外した世界知識にあたるもの。世界知識全体が個人間で完全に一致することはないが、共有度の高いものも少なくない。

つづいて、日本語の自己卑下表出が使われる文脈を分析しながら、話し手の使用動機について考察する。

4.2 話し手の使用動機について

この節では、話し手が自己卑下を行う動機は何かについて考察する。ここで、自己卑下における話し手の使用動機も大きく「自己奉仕的」なものと「対人关系的」なものと二つに分けられると思われる。ただ、この二つが対立的な関係ではなくて、どちらか一方が機能する場合と両方ともに機能する場合もある。

4.2.1 相手の期待を抑える

例えば、(14) (15) のように相手に贈り物をするときや、自宅に招待するときなどに、「ささやかなものですが」「簡単なものしかありませんが」などといった場合、相手の期待を低めると同時に、相手の方に遠慮せず受け取ってもらえるようにという配慮も含まれるといえよう。

(14) ささやかなものですが、

(15) 簡単なものしかありませんが、

このように、話し手から見れば、相手にあまりにも高く期待されるとあとでがっかりされたりする可能性もあるから、相手の期待を抑えておいて、自分への負担も小さくする一方で、聞き手から見れば、対人関係上では、相手にも負担をかけず、遠慮せず受け取ることができるのであろう。

4.2.2 謙遜な態度を示す

前節の分析からも分かるように、自己卑下と謙遜とは重なった部分もあるが、本稿では、謙遜を示すことは自己卑下表出を行う動機の一つであると位置づけた。「ほめ」に対する自己卑下のことや改まった場面で、自分自身や自分の身内の人に言及する場合の自己卑下はそれにあたる。遠藤(1995)が「謙遜とは、より望ましいものとしての印象を獲得するための、逆説的自己宣伝にほかならない」と述べたように、それは自分の謙遜さ、品行のよさをアピールすることとなる。

(16) 〈BTSJ 初対面雑談 27〉【B が小さい頃からアメリカに暮らしていたことがあることと、専門が英語で、[大学名1] 大の英語科で勉強することを A に伝えたあと】

01 A：すごい、スペシャリストじゃないですか。

02 B：いやいや。

03 A：[大学名1] 大の英語科って、すごいじゃないですか。

04 B：うん、英語しかできないんですよ。あの、多分、あの

05 A：英語でできれば十分ですよ。

06 B：副専攻、副専攻でドイツ語とってんですけど

07 A：あ、難しそう。

(17) 専門家ではないので自信はありませんが、○○については××と理解してもいいのではと思いますが、どうでしょうか？

(16) では、相手のほめに対して、話し手が自己卑下して謙遜を示している。(17) は、相手に質問する前置き表現となるが、話し手が自己卑下をすることで謙遜の意を表したとともに、相手に対する FTA も軽減されると思われる。

4.2.3 拒否する

相手の依頼や告白に対して、直接的に拒否するのではなく、自己卑下をして間接的かつ婉曲的に拒否することができる。例えば、以下のような例である。

(18) 〈BTSJ 女性同士の断りの電話〉【A の代わりに言語調査の実験に参加してもらいたいと B に依頼する場面】

01 A：ちょっとさ、最初に言った高校時代の、友達なんですけど、

02 B：うん

03 A：一緒に行ってあげてもらえませんか

04 B：うん——、い、いやだ。言語でしょ？だって。

05 A：言語。うん、なに、だめ？

06 B：苦手。

07 A：うん、まあ、お金とかも出ないんでちょっと、頼みにくいんだけど。とか言いながら頼んでるけど。

08 B：やー。え————えーと。

09 A：いや、ごめん、もう、む、無理ならいいけど

10 B：ごめん

(18) では、相手の依頼に対して、06 B で「言語が苦手」だと自分の能力について卑下して、「苦手なので、お役に立てなくて」という意味で拒否している。それは、直接に拒否することは相手に対する FTA が大きくなってしまうため、自分のことを卑下して間接的に拒否するのはその FTA の度合いが軽減され、対人関係上には好まれるのであろう。

それに、告白された相手を拒否する (19) の例も同じである。

(19) 【告白された相手に】

A：僕には B さんはもったいないです。

(5 の再掲)

(19) では、「僕には B さんはもったいないです」という表現で、話し手である「僕」の相手として B はもったいないという意味で、自分のことを卑下しながら、相手を高めている。「僕には」という表現を使って、自分の評価を相対化して、B さんは僕にはもったいないが、他の誰かには相応しい相手となるという意味を表すことで、相手のことを押し付けがましくならないように婉曲的に拒否している。

4.2.4 責任回避／辞退する

話し手が責任などを回避したり、仕事を辞退したりするときも、自己卑下表出を使うことがある。

(20) 【ある仕事を A か B のどちらがやるについての会話】

A：それについてはあんまり詳しくありませんので、

B：いや、でも、私、実は手元にまだきつい仕事が残っていたりして (作例)

A は自分の能力について卑下して、自分はどうもそういう仕事には適任ではないというふう述べている。ここには、当該の仕事を受けたくない、つまり辞退／責任回避という動機が読み取れる。

4.2.5 発話の雰囲気のを和らげる

談話の流れにおいては、会話が常にスムーズに進むとは限らない。会話の雰囲気がきまづくなったり、会話の進め方が良くなかったりする場合もよくある。そのような発話の雰囲気を和らげるストラテジーの一つとして、自己卑下表出があげられる。例えば、

(21) 【酔っぱらった津崎を車で送った百合と風見との話について】

01 津崎：あの、この間、百合さんの車の中で、実は起きてて、風見さんの話を聞いて、
とっても大事なことに気づくことができました。ありがとうございました。

02 風見：狸寝入りで人の話を聞くななんて、悪趣味だな。

03 津崎：すいません。

04 風見：なーんて【笑い】気づいてました。

05 津崎：気づいてて、あの話を？

06 風見：僕は性格が悪いんです。

『逃げるは恥だが役に立つ』第 10 話 (13 の再掲)

(21) ではまず、津崎が車の中で百合と風見との話を聞いて大事なことに気づくことができた

ことを風見さんのおかげだと思って感謝している。それに対して、風見が「狸寝入りで人の話を聞くなんで、悪趣味だな (02)」と津崎のことを揶揄する。すると、今度は津崎が「すみません (03)」と謝るが、風見が「今は冗談だったよ」と言うように「なーんて」と言ってから、「気づいてました (04)」と言った。この会話の流れでは、「気づいてて、あの話を? (05)」という津崎の発話のあとに、風見が「そう、わざわざ言ってくれたのさ」と言っても自然であるし、その続きとして、津崎自身が「(あの話を) わざわざ言ってくれたのか」と続けて言うのも自然となるであろう。また、ここで津崎が、「狸寝入りで人の話を聞く僕のほうが悪趣味だとしたら、気づいてて、あの話をわざと言ったそっちのほうはなんなんですか」というような発話をするのも不自然ではないようである。このような状況の中で、風見はわざと、「僕は性格が悪いんです (06)」と自分の性格について卑下し、冗談を言いながら発話の雰囲気のを和らげて会話を終わらせた。その使用によって、いくつかの機能があると分析できる。まず、風見は自己卑下して、相手の津崎を恩恵を受けた立場に置かないことで、相手に負担をかけることなくすませることができた。また、その話し手自分に対する否定的評価となる自己卑下は、先行文脈にある相手に対する否定的評価となった「悪趣味」に対する補償行為にもなるのではないと思われる。それに、その使用によって、ユーモラスなニュアンスが出ただけでなく、聞き手の津崎にはそのまま会話を終わらせてもいいし、話題転換して会話を続けてもいいという会話の雰囲気を作っていたとも言えよう。

4.2.6 相手に対する否定的評価を引き出す

以上見てきた例では、話し手は自己卑下を使う動機として、自己奉仕的な動機もあれば、対人関係をよりよくするために使うものもあった。

ここでは、話し手が相手の行為や言葉遣いの不適切さを表し、話し手の相手に対する不満や文句という否定的評価を引き出すために、あえて、自ら自己卑下をする場合を考察する。「あなたを信じた私がバカだった」のように、自己卑下をしていて、明らかに相手を批判する例もあれば、(22)のように、友人の間で発せられたやや皮肉的な自己卑下の発話もある。

(22) 【連絡もなく、約束の時間に遅れた A が来た場面】

01 A: ごめん、お待たせ。

02 B: よかった。私、ここ初めてなので、場所でも間違えたかなと思った。

03 A: いや、ほんとごめんなさい、遅れてしまって。 (作例)

普通、待ち合わせの時間や場所を間違えたりするのはよくないことで、否定的評価になりうると考えられよう。(22)の例では、自分が「場所でも間違えたかな」という発話はやや皮肉な言い方で、「時間になったのに A さんの姿が見えなかったから、私が待ち合わせの場所でも間

違った可能性がある」と心配したのよ」という意味となって、「時間になったのに連絡もせず来ないまま待たせるそっちのほうがよくない」というニュアンスが読み取れ、相手の行動の不適切さに対するやや不満な態度が表せる。

(23) 【A と B が恋人同士で、B の解けなかった問題についての会話】

01 A：こんな簡単な問題も解けねえなんて、おまえほんとバカだな。

02 B：だって、分からないもん。

【しばらくして】

03 A：ねえ、明日何ゴミの日？

04 B：私には聞かないでください。バカなんだから、分かりません。 (作例)

(23) の例では、相手に言われた言葉（「バカ」）を引用して、自分のことを「バカだ」と自己卑下をしているが、それは、相手の先行の発話にある言葉遣いに対して不満や文句を表すために、意図的に発せられた発話と理解できるであろう。「あなたには「バカ」と言われた以上、もう「こんなバカの私」には何も聞かないでください」というような意味で、自己卑下して、相手の言葉遣いの不適切さに認識させようとしている。

5. まとめと今後の課題

本稿は日本語の自己卑下表出を主な研究対象として、その使用される文脈と話し手の使用動機を考察してきた。その中には、話し手が他人からよく思われたいという自己奉仕的な動機もあれば、対人関係をより良くしよう、会話をスムーズに進めようといった対人関係上に好まれる動機もあった。それに、相手の行動や言葉遣いなどに対する不満や文句を表し、相手に対する否定的評価を引き出す用例も考察した。自分自身のことを低く評価する自己卑下表出は、使用される場面や文脈によって、いくつかの機能が見られることから、話し手の言語運用上の一種の戦略にもなっているのではないかと思われる。

しかし、本稿で扱うテレビドラマの台詞は比較的日常生活に近いという特徴はあるものの、編集されたものが多く、作為性が高いため、分析の用例としては限界性もある。今後より多くの自然会話のデータを収集し、考察を深める必要がある。そして、2節で提起した自己卑下表出の後にくる聞き手の反応や後続する談話の流れも含めて動的に考察していきたい。また、自己卑下表出における日中対照研究も興味深い。これらの全てを今後の課題としたい。

(ずい ぎょうせい・言語文学専攻)

参考文献

- 遠藤由美 (1995) 「謙遜——逆説的自己宣伝——」『立命館産業社会論』第30巻 第4号 (通巻83号), pp.43-52
- 加藤重広 (2009) 「動的文脈論再考」『北海道大学文学研究科紀要』128号 pp.195-223
- 釜田友里江 (2017) 「日本語会話における共感の仕組み——自慢・悩み・不満・愚痴・自己卑下の諸相——」名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文
- 齋藤勇 (2006) 『日本人の自己呈示の社会心理学的研究——ホンネとタテマエの実証的研究』誠信書房
- 関崎博紀 (2014) 『日本人大学生同士の会話における言語行動としての否定的評価の研究』筑波大学人文社会科学部博士論文
- 全鐘美 (2015) 「自己卑下呈示に対する受け手の発話」『日語日文学』68, pp.119-133
- (2016a) 「接触場面における自己卑下呈示の一考察」『日本學研究』49, pp.285-311
- (2016b) 「自己卑下呈示の出現における日韓対照研究——女子大学生間の初対面会話を中心に——」『日本學報』第108輯, pp.23-48
- 吉田綾乃・浦光博 (2003) 「自己卑下呈示を通じた直接的・間接的な適応促進効果の検討」『実験社会心理学研究』37, 日本グループ・ダイナミックス学会, pp.65-75
- 吉田綾乃・浦光博・黒川正流 (2004) 「日本人の自己卑下呈示に関する研究：他者反応に注目して」『社会心理学研究』20 (2), pp.141-151

コーパス

- 宇佐美まゆみ監修 (2011) 「BTSJによる日本語話し言葉コーパス (2011年版)」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究B (課題番号20320072) 研究成果